

「附」 日本史

序

人間性に於ける史観

本文

縄文時代の精文化

彌生時代と帰化人文化

人間性に於ける史観

人間は人間の「種」によってなり、その特殊性である意識活動が、人類史をして猿類とは異なる、判然とした史実を展開している。これは史観に事更なる方則や定義をもうけて、観察しようとするものにとって障害となり、その法則性、即ち一種の宿命論的、偏執性と妄断を伴なり、非創造的な誤謬を犯す事にもなる。

なお事更に法則性をもうけ、定義づけなければならぬなら、自ら持つ、人間性そのものに對し、史的法則を先づ考える可きであつて、そうする事が、真理探究に忠実なものとなる。

何故なら、近年いわれている歴史的法則とは、單なる經濟的な見解を主軸にした段階論でしかなく、それによつては究明の出来ない部分、即ち人類史の六十万年ともいい、二十万年と呼ばれている、永い年月の人類の生體の究明は成り立たない。これは單に、蒙昧から野蠻、古代への説明を皮相な抽象論で片付ける以外になく、又同時に、たかだか世界史上に於ける四、五千年以前、日本で云うなら二千年前後からの、しかもその中の一面面を捕えての偏執的な、説明を出でないからである。

人間は、現在のこの人間の形態になる以前からの、變化体であり、否この形態を持つ、現生の人間そのものになるまでにさえ、「種」として持続されたであろう、その人間性そ

のものに變りがなかったとして、多くの變異、移伝と隔世移伝、突然變異とを、經驗する事なしには、成立する事のなかった動物なのである。

こうした動物であつたが爲めの、そして現に動物である故の共通性や、その中に持続された、人間的特殊性を認知する事なしには、何事も語り得ないものでもある。

また人間は、その歴史過程に於て、その特殊性としての、精進進化の展開史を加味する事なしには、考えられない、創造性をその特殊性として持つことについても、他動物にない、非常な特殊性を具備している動物であると云う事が出来る。

それを單に、人間なればこそ作りもしたその事を、即ち結果としての次元でしかないものを、それこそ、人間の精進的な創造の結果でしかない生産關係や、經濟關係と云うその事を基点にした、唯物史觀的擬似法則を持つて、律し去ろうとする如き事は、その法則と稱する偏執性に囚らわれた部分現象を持つて、すべてを律しようとするもので、延いては人間不在の論理を發展させる事にもなり、その現象以前の史実である、何十万年に及ぶ歴史が、我々人類にはあつたと云う、この真実を如何にしようとするのであろうか。私達はこの事実を考えるが故に、……、より真実を愛するが故に、先づここから考えられなければならぬものである。

人間は常に進化發展を余儀なくされている、創造性を持つ動物なのである。この事を故意に放棄したモルガンの示唆や、エンゲルスの史観は、例えそれが、野蠻と

末開に分け、各々三期に分類し、人間が魚獣類の生活資料化や、火の使用、製陶技術、等によりそれを立証しようとして重視されていようとも、人類のみによって創造された、人類の、人間性に於ける発端と発展、こうしたいわゆる史観構成以前の、人間性そのものに遡る事のない、浅薄で皮相な謬論でしかないことだと云える。

又これはルネッサンス以来の、自我の覚醒により、神の座より神を引き降ろした余勢をかつて、二十世紀には、科学そのものの発展が、世界を驚ろく可き進化に導引きはしたが、やがて神に替るに分科された科学が、神の座につくに至り、併も、その多く分科された、その中の一分野を基点として、全体を律す可く偏執発展せしめた、詭弁とこじつけを脱し得ない、論理の展開としてのものでしかない。

(註) 人類史観概要参証

一、縄文時代の精文化

現在日本と称するこの島嶼が、未だ大陸続きであった頃、南方形の動物がさかんに渡来した。この頃、時を同じうして、北京原人が活躍した時でもある。

その頃、あるいはその動物達と共に、人類がこの日本に来ていたのかも知れない。此の

頃は第三氷期であり、約二十四万年から十五六万年以前だと云われている。

この頃になって、トラ・タヌキ、ナウマン象の南方形動物と共に、人類の痕跡がみえはじめている。

その後、第四氷期の五万年―一万年の間の後半期が、旧石器(無土器文化)時代の最も栄えた時期であり、大陸との陸路交通の時期でもあった。

その後、大陸との遮断期に於て、九州と四国の島嶼化したのは、八千年―五千年以前であり、その時期を頂点として、現在の海岸線が作られている。

この間の人類の遺留品は、日本全国で千余ヶ所の遺跡から発掘された、人骨片と石器である。この石器が、ユーラシア大陸の文化遺品と、驚ろく可き類似点のある事も実証されている、と云う事は、人類の進化が、同じ様な謎を秘めているともいえる。

これは猿類にはない、人類のみがなし得た文化史実の発端を教示するものである。勿論、この間木片、素朴なる木器によるものはあったであろう、この時代の遺品として、顕著なものとしての石器こそ、人類なればこそ、その意志による創造としての器具という可きであらう。

その間の食糧は、動物、植物、海産物があり、他の動物の食料のような、単調さではなく、豊富で多くの種類に充ちている。これは秀抜な意識活動が、人類だけにあった証左という可きではなからうか。また、共同で食糧を得、共同で住居し、他動物からの防衛に、

攻撃に当たった事は、何人も異議をはさみ得ないものである。

以上は先縄文文化の時代である。

論旨を進めるために、便宜上、渡部義通氏の言を借りると……。

モルガン、エンゲルスの法式をもつてすれば、縄文時代を、原始的な停滞の時間と定義づけているが、例えばそれが、一次的、二次的、三次的な、形としての定義づけではあり、また、その間の文化的変遷は、暫進的で緩慢な進展を意味する進化であつても、これは徳川封建期に於ける、支配権力による鎖国と、封建経済組織下に於ける、沈滞を意味するものではない。

もともと権力支配は、大きな停滞の原動力であると共に、権力支配下では、一切が広汎に平等に進化発展するものではなく、彼自身のための、極部的なものに作りあげられるという、非進化的な、拘束と強制と云う停滞性を持っている。

これは資本主義、権力支配主義が、戦争によつて破壊した、過去に於ける停滞以上の停止の事実や、専売法とか特許法の如き、独占的秘密主義や、国家間の機密と称する、知識の独占に於ける、不交流のもたらす非文化的処置、等々に於ける、停滞以上の、停止的在り方こそ論じられる可きである。

この停滞をさえ、人間の創造的意欲は打破しているのである。これは、精心文化面に於ける、進歩、発展が人間性そのものに於て、なされている事でもある。

これを証するものに、縄文時代に於ける、祭祀、呪術、信仰、等々の土器に表現された、文様の変化と推移、及び、土器の形式、形象、製作方法、厚焼、中焼、薄焼、大形、小形、に於ても、いちじるしい変移、進展が見られるのである。

とはいえ、人知の低さや、交流交換を意味する壺形の類似性や、黒耀石の分布なども、その研究の資料としては、非常に価値あるものと思わなくてはならない。

なお、当時の編物技術の変遷や、住居遺跡に於ける囲炉裏の形の変移、カマドの変遷、貯蔵用土器の製作や、貯蔵用竪穴にまで及ぶ、変化、発展を例記して見ても……。

縄文早期、西紀前七五〇〇年から、六七千年以前に、尖底形壺があり、その施文技法の進展は、回展施文具によるものを見るに至り、やがて、縄文文化が絢爛と咲く中期に至るのであるが、その文様の変化は、爪形文、粗縄文、貝殻文、沈線文、押捺文、磨消縄文、線条文、突帯文、火焰文、結節文、捺糸文、浮線文、等々が、深鉢形から円筒形、広口形、壺形、浅鉢、杯、高杯、注口土器、等々、その種類の多様性に於て、吃驚を禁じ得ないものがある。

この間に、洞窟住居、竪穴住居と逐次その生活状態も変移し、生ま物を直接たべたであろうそれは、遠い夢と化し、煮沸器としての土器使用から、貯蔵用壺となり、物質的生活面が開拓されてゆく。その精心生活上の発展は、初めに地上、又は床地上の平地で暖をとったものが、凹地を作つて焚き、やがて周囲に石を置いて囲い、高縁となり、カマドと変

化し、その煙りを住居外に出す為めの、工夫までなされている。

この囲炉裏の進化は、土器製法上にもあらわれ、初めに生粘土の壺（土器）の上から木の枝や葉を乗せたり、囲炉裏の中に尖底を突っ込んで立てて焼いたであろう、それが、カマドの上に乗せて、上下、前後を返えして交互に焼く、それが、焼カマドとして専用の、独立したものになり、昇りガマ（彌生後期）までに進化する。

なお編物技術は、手ないから紡織となるが、その器具は、初めに石錘を用い、後に土器片を加工利用して土錘を作り、現今でも農村にゆくと見る事のある俵作りの様な形態から、織物機、石篋、木篋、と変化したものの様である。

以上は土器や囲炉裏、編物技術に於ける変遷史であるが、その中の、土器の施文形式上の進化に、見のがしてはならない、精細面の動きを見ない訳にはゆかない。

それは、土器の文様と形式を、これ程多様化するに至ったものは、製作者の観念の変化や、あるいはその創造性が何によって興ったか？ 単なる変化ではなく、部属、宗族の要求と、個人の創造性と云う、精神的発展が当然考慮されなければならぬ。

それをこの場合、その時代の生産力と狩猟漁撈に於ける、技術発展段階と称して規制したがる、その狭量な既成概念や、偏見は当然排除す可きであって、余りにも精神的なもの、即ち意識活動こそ、重視されなければならない、その尤も顕著なものとして実証されるものに、呪術的社会の存在がある。

そこには、歴然たる祭祀用品であり、煮沸用貯蔵用、その他日用必需品としてのものでもない、供献用具及びそれによる変化として、判然と認め得るものがある事である。

これは、魏志倭人伝に記載されている、二、三世紀、彌生後期の事であるが、倭の百済国が、女王卑彌子の時代には、三十余国であったと云われている。

これは何を意味するか。少くも卑彌子の統制に服さない、自立の国があったと云う事になる。

この事は、彌生中後期の期間に於て、なお存続した自治国（村落共同体）の存在を意味付け、その生活様式や、祭祀呪術の行われた、宗族的な相違を、何らかの形で残しているに違いない。

即ち祭神を異にする、あるいは呪術者を異にするが故に、卑彌子に同調する事のなかった国々であったであろう。

その宗族または部属、あるいは氏族、村落共同体（協同自治の集合聚落）が、あった事を誘証するものと思考される。とすると、その生活形態が、何等かの形で描かれていなければならぬ。

それが、例えば独自の形態やその相違点、又は施文形式や、石器の形状の何処かに、何か表徴されるものがある筈である。

そんな想念から、私はこの点に関し、異常な関心と興味を憶え、注目した。

こうした当時の国々、と云うより村落共同体を、現今でいう地域別に、丹念に探知して見る必要がある。

それによつて、当時の国々の境界が、描き出せないとも限らない、そんな希望を抱いた。しかし、何分にも卑彌子の時代、及びその前後、彌生前期からとその以後には、ロクロ使用とか、稲作、青銅器、鉄器、木器があり、いわゆる金石銅器時代の為め、埴化人による感化と影響による生産性の変化と、普遍化や、宗廟建築や高脚家屋への変化があり、あまつさえ、古墳群に表徴される、支配権力発生に伴なう、祭祀そのものの変移による、大陸の祭祀、葬墓形式の発生を見ている。

なお、統一的強大化と共に、宗教的、文化的交流によつて、劃期的でさえある、文化の発展と同時に、彼の地、漢、韓との交流が、武器、工具、農具を、特に権力維持の為めの闘争に、あるいは籠絡、買収の為めのものとして使用され、統轄されていった。

というのは、当時の日本、倭人の生活は万事に遅れ、むしろ非文化人が文化人に接する態度もあつたであらう。その為めに、武器も工具も農具も、祭祀葬墓用にまで使われ、祭祀そのものも、縄文時代の呪術的なものから、それを取り入れた、大陸宗教形式である、祖先崇拜の宗廟宗教的なものに変化し、権力闘争上の大きな威力ともなり、それ等の権威と闘争の結果が、卑彌子や倭の五王を存在せしめたのである。

こうした時代は、自づと、器物・器具の斉一性が産まれているので、この時代のもものは、

この場合の本研究では、放棄する以外にない。

縄文時代の遺跡を探つてみて、その宗族共同体的なものとして、相異なる集団（聚落）があつたと思える。

これは、文様の特徴ある相違によるのであるが、地形的にみても、当時の幅広がつたであらう河川が境界になっていたり、あるいは一定の平地を聚落とする結果、丘陵や溪谷又は、河川や湖沼、海湾、入江、山岳が境界になったもののようである。

この横浜市で言うところ、大岡川を間にはさんで、磯子区の三殿台と、南区の山王台、港北区の鶴見川をはさんで、菊名、大倉山周辺と折本貝塚などが、その好適例であり、戸塚区でも、公田町と名瀬町とは、特異な違いがその文様にあらわされている。

又、磯子区屏風ヶ浦背後台地にも、他の地域では見ることのない、浮線結節文の特徴ある文様を見ているが、これ等は非常に興味ある問題を、提起しているもののように思う。魏志倭人伝の著者のような、外国人、外来者、埴化人が見聞した時、その集団生活や、村落共同体の境界を意識するであらうし、各々の語らいの中にも、自づと宗族的な、あるいは生活の相違などの観点から、恐らくは当時として、一国として見たのではないのか、一国として見える程、それ程自主性の強い自治体であり、確固たる宗族的な、村落共同体であつたのではあるまいか。

これを実証するとも思えることを、桂ユキ子の万葉ドライブの一節が書いている。

それは、最古うまくだの万葉にある歌として、『馬来田の嶺る隠りぬ、かくだにも、国の遠かば、汝が目欲りせむ、』の一首を引いて、この国とは村を指すと書いている。

万葉のこの頃になっても、末だ村を国と云っていた、村境即ち国境であり、最古の時代の国境とは、独立した村落共同体を国境として見たものであろう。

こうした意味に於ける村落共同体が、魏志倭人伝中にある百余国、卑彌子に至って三十余国になった、と見聞されたものであろう。

勿論これは北九州地域及びその周辺の狭い地域でのことであらうし、河川、溪谷、海灣、入江、湖沼、丘陵、山岳を地図上で見て、それを境界線として描くと、北九州だけで百余国を裕に上まわり、納得できる。

その頃の関東地方及び東北地方、関西地域一体の、こうした見地からの究明は、未だなされたことを聞いてもいないし未知数であるが、ずーっと後期になって、関東地方は五十ヶ国であった、と云われている。

こうした意義から見ると、邪馬台国は北九州と言っても間違いはなさそうである。

なお、当時漢、韓の地は戦乱にあげられていて、亡命者や流亡の民が続出した時期であり、この人々が所謂帰化人となって、倭国の沿岸に漂着し、定住するに至ったことは、当然のことであり、これが延いては、その先進性のある生活様式が、米の栽培、銅鉄の熔解とその器具の使用、ロクロ使用の土器製作、高熱利用のカマドの製作とその焼物、土師器、

須恵器、等々が原住民（倭人）との相互交流の中に流布され、もともと早く工人や農民が渡来し、早く原住民と融和した地方が、経済的に進歩した有力な地帯を結成し、それが、北九州、出雲地方、瀬戸内海周辺をいち早く開拓し、大和地方にも波及したものとと思われるが、それ以前、縄文、後晩期にすでに大共同聚落、又は村落共同体の多数が在住していた、後には大きな力を対外的に発揮していた、とも言えるのではないのか、確たることは、今の筆者には解りようもないが、ただ非常に興味をそそるものとして、土師器や須恵器のかまど跡と考える所が、即ち帰化人の定着地とも言える所が、この横浜では、大聚落跡を離れた、谷間近くにあることであり、その近くに住居跡や昇り釜の跡も見ることができ、と言うことは、帰化人が、原住民と同化するまでの、彼等の生活が描かれているもののように思えることである。

以上のことを思うと、いきおい縄文中・後・晩期のものに重点を置くことになり、そのつもりで探究の歩を進めた。

と果せるかな、ホンの僅かな地域の違いの中にさえ、形態や施文形式に於ける特徴を見ることができた。

縄文中・後・晩期に於て、その共同生活上の主軸になると思われる大形土器や、中・小形土器にも描かれている地域的特徴のある文様と形態、及びその施文形式は、各地区（大聚落地域）毎に、その特徴を判然と描き出していることが見受けられた。

とは言え、これが全国的にそうなのか、それとも、筆者の現住したこの横浜、それも南区、磯子区、戸塚区、港北区、西区の範囲だけのものなのか、未だ寡聞にして、こうした見地からの文献に接していないのと、私自身の実地検証の範囲の狭さからの、結果のみで早断はできないことではあるが、併し、要は私自身、人間各個に特殊性（個性）を見得ると共に、その集団や地域に、創造性のもたらす、特徴や個性をも見出し得ると信じている。

こうした想念から私の探究は続いた。幸い、私の関係する方面からの協力によって、その機会を得たが、以下その概略を記載して見る。

横浜市磯子区三殿台の遺留品中の、縄文中・後・晩期の土器は、その主要土器と思える、大形、広口形円筒状壺、及び中形円筒形壺の施文形式が、三角形を配置し、その形の応用又は転用した、斜縄文、羽縄文、貼付文、彫刻文、瓜形文、押捺文、撚糸文によって占められている。

それに反し、南区永田町山王台の遺留品中の、大、中形、広口形円筒壺（ラッパ形）の口縁部、及び長縁壺の胴部は、渦状文によって占められ、その出土品二十八ヶを数えているが、磨消縄文、貼付文、浮彫文、斜縄文、羽縄文、等々によって占められている。その施文形式は、渦状文が主要部の文様として、殆んど凡てに施こされている。

又港北区の折本貝塚周辺からは、竹管文を特殊な文様としており、戸塚区のゴルフ場周

辺からは、浮線文、匹字文がその異特徴でもある。

等々、各地域の特徴を列記してみたが、各地区とも、他地域との類似文様をみることなく、三角形の三殿台、渦状の山王台、浮線の戸塚、竹管文の折本と、四様の判然と分別できる施文形式があった。

この外、沈線文に竹管文を加えた、特徴ある形式のある地区をもみたが、確認するまでに至っていない。

しかし、共通性のあるものとして、絡痕縄文、斜縄文、貝殻線条文、撚糸文、磨消縄文、その他が見られる。

なお三殿台と山王台との距離は、大岡川をはさんだ、当時としては湿地帯であったであろう、西側の広面積をひかえて、直線では渡ることができなかったと思われる。直線距離で三キロメートル弱、交通可能な尾根伝いで、約十二、三キロメートルの間隔があり、相互に交流のあったであろうことは、思考される。

これ等の各特徴、及びその相違点は、各地域の独立した宗族、宗教、祭祀、呪術を意味するものの様であり、各地域の自治組織に於ける経済構造、又は社会機構の相違と独立を、裏書きするものの様に思考される。

が、これ等は、その互いの独自性にもかかわらず、相互に交流していた形跡は顕著である。

要するに、祭祀、呪術上の技術、又は形式上の相違はあったが、黒耀石や石鏃の同形、中に二三の壺形の類似等に見る、物品の交流はなされていたと見られる、遺物および遺跡構造が実在する。

これ等を思う時、宗族関係としての相互共同体は、同一の土地に住み、同一の神祀を持つと云う関係を通じて、地域集団としての交流と、祭神又は呪術の同一性と、その為めの共同の祭祀に参加の為に、土器、祭祀用品の類似同一性が見られるのではないか。即ち祭祀共同体である。

この祭祀共同体の同一性が、司祭又は呪術者の、技術的權威の力をかりて、ある種の広汎な統一が産れる。

この呪術宗教と、彌生期から古墳時代に於ける埴田人に依って伝播した、宗廟宗教との隣界点、及びその分離、又は混同化の時期はいつか？ 東北地方、関東、関西、九州、まで大きく分けて見てどうか。それこそ広範に涉つて調査研修しなければならない、重大な考古学的課題であらう。

権力支配による統制制度と、強要による（古墳時代）、宗教的統一がなされるそれ以前の、縄文期に於ける、呪術宗教の祭祀、呪術に使用された祭祀用品及び土器等の、分布状態を確認したいものと思うが、浅学非才の上に、一切の準備その他に欠如する現在どうにもならないが、私の見聞したもの、及び文献上のものを列記すると、鹿の骨の焼いて亀

裂した跡、焼骨、鹿角の上辺部と下部に穴をうがつたもの（祭場崇厳用品か？）石柱、石棒、列石、土偶、獸形把手（犬面？）の脇き同位置から発掘された、土器（壺）の特殊な形と施文様、竪穴住居の一隅に、祭壇らしきものを一ヶ所見る事の出来た大聚落跡、環状列石は拝跪されたものであろうか？ その他灯明用壺？（香炉形土器）抜歯、刺青、葬法等に見る類形がある。

併し、磨製石器は、多量に発掘される打製石器に比して、非常に僅少であり、又聚落地区によつて、その製法を異にする部面もあり、それは、側面有角のもののみ所と、側面を丸く弾丸形であつたり、丸い側面で前後部扁平たく刃部になっている所もある。

その他場所によつて相違する特徴を見せている事と、使用後の磨滅を見る事が殆んどない、などから、葬墓用、又は祭祀用品としての物のように思われてならない。なお古墳時代及び、それに近い世代になるに及んで、古墳の中から銅器、鉄器（槍先、銅鏡、銅才）の模倣と思われる石器と、磨製石斧がある。

以上を思う時、縄文時代に、日常必需品として使用したものは、打製石器であつて、磨製のもの、特殊なもの、例えば、祭祀、葬墓用の為めに製作されたもののようにある。

こうした、ある種の生活上の共通性と、特殊性との開きは、祭祀、呪術の普及、及び独立があげられるであらう……。

だが、この時代の生活状態に於て、クローゼの説の様に、熟練した狩猟者は、不熟練の

ものより多くのものを得る事は確しかであるが、然し、彼等の中の最優等者ですら、不安定な、常に動揺した生活状態のもとにあつては、資産の集積はなく、結局は彼も又、他のものと同様に貧乏である。

云々は、生産が常に個人のものでなく、宗族又は共同のものとして消化された時代である。その意味からは、或種の富の集積は可能であつた、という反証の成立を認めている事ではなからうか……。

即ち、三殿台遺跡等より、大形の壺（煮沸用ではない）貯蔵用と思われるもののある事で実証される。

又共同に富み、共同で欠乏する故に、共同事業（狩猟、漁撈）は真剣であり、積極的であつたであらう。

以上によつて思うに、クローゼは、近代の資本主義的蓄積や、それから来る孤立性から脱し得ない感覚で、推論したとしか思われまい。と云う事は、社交性（社会性）本能によつて結束し、行動した、利己より共同を重視した人類の過去に思い至らなかつた為めの誤断だと云える。

いづれにしても採集経済時代は、富の蓄積は少く、僅かなりとも行われた蓄積は、共同生産の上昇と余裕と云う、人間なればこそ持つ智能の発展をうながし、今日を明日に、明日を一ヶ月に、そして一ケ年に延長す可く努力したのであらう。又それから産れる時間的余裕

が、隣地との交流を深め、知識と技術の練達を助けたり、個人の才能を誇る、共同の中の芸術的天分をも發揮する事にもなり、土器や土偶、岩偶、石器、鏃、等々に工夫と創造がなされたであらう。

それ故に、聚落的集団の特徴も、繁栄の表徴として描かれてもくる。

この特徴が次世代に、集団の中の部分として、石器工場、骨角器製作、土器製作等々に、地域的特徴としてあらわれてくる。

しかし、この地域的特色は、小部分の技術的特色となり、縄文晩期までの採集経済爛熟期を持つて終っている。

なお、縄文晩期の亀ヶ岡式土器の、いわゆる芸術性の高い土器が現われる様になつた時代について、その精神的方向を述するに当り、その当時の生活状態は、生産力の発展が、相対的には、狩猟生活の一般的窮乏は、以前とくらべて克服されており、生活に余裕が出ている事は確しかである。この余裕が、生活即芸術に連関したと共に、祭祀技術の繁囂化や、磨製石器の様な、間暇なしには作れないものの製作となり、それが祭祀用とか、葬墓用に使われる基点になつているものの様である。

と云う事は、精神上、及び技能上の発展として、土偶、岩偶、土面、土版、石版、壁面画が、祭祀、呪術の変移として必要であり、文様上の特徴も自づと描かれ、原始的な結縄文が、紐状の結節文や、縄文一つとどめない押捺文、貼付文、彫刻文、等々完全な姿を見

せている。

そうして、やがて、アヅキ、ゴマ、ウリ、の種が、武蔵の真福寺遺跡から発見された。その時代になると、一切が実用本位のものに変化してくるが、原始農業の開始が思われ、経済活動が多忙になって来たものであらう。

なおこの縄文晩期の文化的影響が、西日本にまで及んだ事は特筆に値する。が、この間、所謂政治性なるものが、一顧だになかった、と云う事は、余剰生産物なり、余剰労働が手元に蓄積され、共同聚落の隆盛を意味している事であり、然もなお、それが階級を産み出す為めの根柢にはなっていない事である。

即ち、物質的根柢によって、政治的あるいは階級社会は、成立するものではない事を、縄文式文化の時代の歴史が、判然と語り、且つは実証している事である。

彌生時代と帰化人文化

縄文式文化の末期に、西日本にあらわれた様相の中で、縄文文化遺跡と彌生文化遺跡が、全く相異った場所にあつて、両者の併存を認める遺跡がない、とは云え、縄文末期と彌生初頭に、時を同じうして同時に存在したのかも知れない。

この頃は紀元前三百年から百年の間の事であるが……。当時は、内藤虎次郎氏の言をか

りと、

越の尉佗、朝鮮の衛満を例にあげて、『漢の疆域の外にあつて、国を建てた、色々な国は、多分は戦国以来、秦に至るまでの間に、（前四〇三年―一二〇年）外国に流れ込んだ支那人によって形造られた。』と指摘している。

これは支那人である他国人が、侵入された方の国民が自身の手によって、国造りをやったのではなく、支那人の手によってなされたものである、と共に、当時に於ける、漢民族の外域への活発な動きと、その影響力の強大さを語っている。

周末に於て、燕が朝鮮に発展した時が、前三百年代であり、漢の武帝が、朝鮮を攻めて楽浪郡外三郡の殖民地を、朝鮮の北部に建てた。

この頃、朝鮮は漢人の流入と、朝鮮の内部そのものに戦禍が絶えなかった、と云う事は、流亡の民が、平和を求めて多数いた事にもなる。

この流亡の民が、生活と平和、あるいは、他の地区での、捲土重来を夢見た一旗組もいたであらう、それ等が、住む為めの土地を求めて、この日本にもさかんに流入しなかったとは云えない。この人々が、その祖国の風習と思想と生活的習慣と、知識と才能と技術を持って渡来した。

その渡来した人々は、当然、縄文式文化態形を持っていた原住民と、異なる生活様式を持っている。